

古本屋で学んだ 「戦後史」

文藝春秋「諸君！」編集部

統括次長

せんとうとしあき
仙頭寿頭

毎週とまではいかないが、実は母校「中央大学」には月に二度は通っている。傍を通る度に懐かしき青春の日々を思い出さずにいられない。

といっても、実は八王子校舎ではなく旧神田校舎である。神保町の古本屋街へ土曜日に寄る際、地下鉄の駅から地上に出ると、まずはそびえ立つのが三井住友海上の高層ビル。

ここは校舎だった。その先に、トヨタの社員寮がある。ここは生協だったが、神田校舎を体験したのも、入学初年度の一年間のみ。翌年には移転したから、記憶は薄れたままである。

拉致問題で有名になった蓮池薫さんとは、学年が一つ違い、彼は八王子に移った途端に拉致された。学部

は同じでも学科が違うから、キャンパスですれ違うこともほとんどなかっただろうが、あの頃、韓国はしばしば反政府暴動が起る非民主国家で、北朝鮮はまだ「地上の楽園」

的國家だというイメージが強かった。だが、在日の関貴星氏の北朝鮮批判の『楽園の夢破れて』（全貌社）は一九六二年に刊行

されていた。そういう本を古本屋で購入した私からすれば、韓国は反政府運動が出来るだけでも、まだ自由があるわけで、そ

んなことも出来ない北朝鮮こそが実は恐るべき全体主義國家であるというのは自明であった。だが、悲しいことに、人間というのは想像力が欠かしていると、映像に現れるものしか眼に止まらなくなる。自由がまだあるからこそ、残酷な映像が流れ、自由の全くない所では亡命者の証言



（活字）しか真実を伝えられないということが理解できなくなるのだ。大學時代の級友にも「韓国より北朝鮮の方がはるかに進んでいる」とマジに語る者は多かった。

私が雑誌にいた時の企画で、なおかつ出版部にいた時に担当もしたので、稲垣武氏の『「悪魔祓い」の

戦後史——進歩的文化人の言論と責任』（文春文庫・一九九四年度山本七平賞受賞作）がある。この本は、北朝鮮をはじめ共産諸國を「地上の楽園」と賛美した進歩的文化人と、同時代にあつて懐疑的に見つめていた現実派知識人とを対比させながら論じた希有の戦後史論である。この本のために、何十年も前の雑誌論文や絶版本などをせつせと集めたのがもう十数年前のことだ。当時はインターネットの古本検索もなく、古

本屋等をアトラダムに回るしかなかった。学生時代から古本屋通いは趣味だったから苦にもならず楽しい仕事だったが、刊行後も「北朝鮮の拉致事件は原さんの件以外は根拠なし」と論じた大學教授がいたのには啞然としたものだ。そういう学者の粗雑な言論の責任をネチネチと追及する性癖は神保町界限の古本屋散策から学んだといえようか。

学生時代は、他にも早稲田や本郷や中央線沿線の古本屋にも時々足を運んだが、この前、久しぶりに早稲田に行ったら軒先で未だに一冊二十円ですこその単行本を売っている古本屋があつたのには驚いた。パソコンで引き出せる情報量は一見無限のように見えるが、実は金太郎郎のように類似モノの羅列でしかないことが少なくない。それを思えば、全國の古本屋にはそれこそ無限の情報が埋もれているといえよう。そこを探訪しないのは一生の損だろう。

（昭和57年法学部卒）